

『覆面既婚ノンケ男優タケ・下』サンプル

目次

登場人物紹介

閑話四

第四話 絶顶いき！ ノンケ痴漢バス
(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

閑話五

第五話 クリップローターバイブ！

閑話六

最終話 覆面既婚ノンケ男優タケ・大ヒット感謝祭

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

登場人物

三室武明（みむろ たけあき）

34 歳。会社員。

平常時 7.3 センチメートル、勃起時 18.2 センチメートルの上ぞりの仮性包茎。
妻の吹子（ふきこ）と長男の征人（ゆきひと）、次男の宗臣（ときおみ）がいる。

戸川譲（とがわ ゆずる）

62 歳。工場経営。

武明の義父。工場経営に行き詰まり、あちこちからお金を集めて失踪してしまった。

安藤（あんどう）

47 歳。ゲイビデオ作成会社社員。

武明が大学生の時に世話になったゲイビデオ作成会社社員。

戸川への支援をしようとする武明のために、様々な企画を提案する。

三橋（みはし）

26 歳。会社員。

武明の部署の後輩であり、同じスポーツジムに通っている。

閑話四

「そういえば、まだお義父さんは資金繰りがよくないのかい？」

「ええ」

三室武明（みむろ たけあき）は安藤（あんどう）の問いかけに嘘をついた。

武明がゲイ動画の世界に戻るきっかけとなったのは、義父である戸川（とがわ）の資金繰りに協力するためであった。

ところが、二週間前、戸川は集めた資金を持って失踪してしまった。

妻と二人の子供がいる武明は負債を抱えた工場を相続するわけにもいかず、相続放棄の手続きを既に済ませている。

だから、当初の目的である戸川の資金繰りに協力するためにゲイ動画に出演するという武明の動機は既に解消されている。

だというのに、武明はまたゲイ動画に出演しようとしている。

戸川の資金繰りに協力しても焼け石に水だと忠告してくれた安藤に嘘をついてまで、武明はゲイ動画に出演する。

武明は自分で自分の気持ちが分からなかった。

武明はノンケだ。

大学生時代、剣道部のしきたりによって調教され、辱められ、男たちに犯されることもあったが、武明自身の認識ではノンケである。

ケツで感じるように調教されたのは事実だが、武明はチンポの快樂が好きだ。

だからこそ、今でも妻とは週末にセックスをしている。

つまり、武明はノンケのはずだ。

ノンケならば、わざわざゲイ動画に出演する必要はないはずだ。

いや、そんなことはないか……

武明の頭にある考えが浮かんだ。

ゲイ動画作成会社社員である安藤は、武明のために企画を用意してくれたのだ。

ならば、それらの企画を消化するまでは出演する義理があるのだ。

「武明くん、無理はしていないかい？」

安藤の問いかけに武明はぎょっとした。

ゲイ動画に出演し続けようとする己への葛藤を読み取られたのか、と思ったのだ。

武明は安藤の顔をじっと見つめる。

「武明くん？」

安藤が首を傾げたのを見て、武明は思い至った。

安藤は、武明が義父のためにゲイ動画に出演し続けていることを心配しているのだ。

「いえ、義父のためですから」

武明は再び嘘をついた。

もう、ゲイ動画に出演しても義父である戸川のためにはならない。

むしろ、ゲイ動画に出演し続けることは円満な家庭環境へのリスクでしかない。

武明もそれは分かっている。

だというのに、どうして武明はゲイ動画に出演しようとしているのだろう。

円満な家庭環境と安藤への義理は天秤に掛けて釣り合うものだろうか……

武明の脳裏に妻と二児の笑顔が浮かぶ。

妻は、武明がゲイ動画に出演していることを知ったら武明を軽蔑するだろう。

子どもたちはまだ性に目覚めていないから、武明の行為の意味を理解できないだろう。

本当に、安藤への義理だけでこんなことを続けていいのだろうか。

武明は自問自答をする。

「今日も武明くんのアナルをたっぷり苛め抜いてあげるよ」

「武明くんの雄膣は極上品だから、よい仕事だよ、本当に」

共演者たちが撮影の準備をしながら武明に声をかける。

そう。武明は今日もアナルを犯される。

きゅううん……

武明の雄膣が今日の撮影内容を反芻して切なく疼いた。

武明は身体が疼く理由を考えないようにした。

それを考えてしまえば、これまでの武明が壊れてしまう。

そういう予感があったのだ。

このゲイ動画撮影は安藤への義理だ。

それだけのはずだ。

武明は呪文のように繰り返しそう考える。

「じゃあ、そろそろ撮影場所に出発するよ」

「分かりました」

安藤に声をかけられ、武明は思考を中断した。

今も雄膣は切なく疼いている。

武明はそれを撮影への緊張だと思い込もうとした。

きゅううん……

けれど、雄膣の疼きだけは知っていた。

武明の思い込みは欺瞞であり、安藤への義理など動機にはならないと……

第四話 絶頂イキ！ ノンケ痴漢バス

会社帰りのタケはそうとは知らずに痴漢バスに乗り込んでしまう。

遠慮のないボディタッチに始まり、下着チェック、アナル開帳と辱めはエスカレートし、ノンケの純情アナルが痴漢たちの欲棒で蹂躪される！（ストアメッセージより）

タケはバス停の前でバスを待っていた。

ここ数日、会社に詰めていてシャワーを浴びる間もなかったが、ようやく帰宅できるのだ。

自宅の布団が恋しくて、タケはバスが来る方向を何度も見まわした。

タケはスーツ姿に顔の上半分を覆う覆面を身に着けている。

タケの鍛えられた肉体はスーツに覆われていてもなお、男振りを香らせている。
その男の色香に通行人たちがタケをちらちらと見ている。
タケの目の前にバスが止まった。
タケはバスに乗り込んだ。
座席は全て人が座っていたため、タケは適当なつり革を掴んだ。
このまま目的地まで揺られているしかないか。
タケはため息をつき、目を閉じた。
タケはバスの振動に揺られている。
タケはおや、と思った。
ストラックスに覆われたタケの尻を誰かが撫でているのだ。
窓ガラスを見ると、タケの横に男が立っている。
すりすりとした男の手がタケの尻を撫でていく。
タケは最初、何かの間違いだろうと思った。
男であるタケが痴漢をされているなどと発想できなかったのだ。
けれど、男はタケの尻をしつこく撫でまわしている。
タケは顔をしかめて、男の手を振り払った。
男の手がタケの尻から離れる。
タケは息を吐いた。
目的地まで先は長いというのに些末なトラブルで煩わされたくない。
そんなタケの横にもう一人男が立った。
すりすりとした尻を撫でられ、タケは男の手を振り払う。
振り払った端からもう一人の男がタケの尻を撫でる。
「おい、止めろよ」
タケは男たちに警告を発する。
「そうつまらないことを言うなよ」
「俺たちと遊ぼうよ」
男たちはにやにやと笑いながらタケに手を伸ばす。
タケは顔をしかめて、男たちから逃げようとする。
けれど、タケを囲む男の人数はいつの間にか増えていて、タケは取り囲まれてしまう。
タケは周囲を見回した。
タケを囲む男は五名。
誰も彼もがにやにやと笑いながらタケを触っている。
タケの胸板や腹筋、尻や太ももなど男たちの手がタケの身体を這いまわっている。
タケは身の危険を感じた。
男であるはずの己が男たちに弄ばれようとしている。
その予感にタケは怖気に震えた。
タケはそれでも周囲に助けを求めることができなかった。
男である己が痴漢されていると認めることが怖かったのだ。
「楽しもうよ、お兄さん」
「こんな素敵な身体で誘っておいて、貞淑ぶるなよ」

男たちがタケに囁く。

タケはそれでも大声を上げることができなかった。

恥ずかしさと恐れから声を出せなかったのだ。

男たちの手がタケのスーツに伸びていく。

五人はまるで訓練されているかのようにタケのスーツのボタンを外し、ベルトを緩めていく。

助けて……

タケの心は恥辱に震えた。

けれど、それでもなお、男であるというプライドが邪魔をして、タケは拒絶の声を、助けを求める声を出すことができない。

あっという間にタケは、上半身はワイシャツだけ、下半身は足元まで下ろされたスラックスと股間を覆う白のボクサーパンツというバスの中とは思えない姿にされてしまう。

男たちがタケの身体と足を抱え、抵抗を封じる。

男たちの一人がタケの白のボクサーパンツに覆われたもっこりに顔を近づけた。

タケの股間のもっこりは常人より大きなチンポを反映して、前にせり出し、陰茎の形がうっすらと読み取れるものであった。

そして、そのもっこりには小さく黄褐色の染みがついていた。

「お兄さん、白い下着を穿きこなせないタイプなんだねえ。

ションベンの染みがついているよ」

男の言葉にタケは顔を真っ赤にした。

ここ数日、会社に詰めなければならぬ理由があったため、下着を変える余裕もなかったのだ。

「スケベな臭いがプンプンしてくるぜ」

男がタケの股間に顔を近づける。

まさか、とタケは思った。

すう……はあ……すう……はあ……

バスの振動音に混じって、男がタケの股間に顔をくっつけて大きく深呼吸をする音がタケの耳に届いた。

臭いを嗅がれている。

よりもよって、男であるはずのタケが、同じ男に股間の臭いを嗅がれているのだ。

それも、しばらくシャワーを浴びる間もなかった不潔な股間をだ。

あまりにも恥ずかしく、屈辱的な事態にタケは唇を震わせた。

それでもなお、タケは羞恥と恐怖から助けを求める声を出すことができなかった。

タケの股間に顔をうずめていた男が顔を上げた。

「ひいっ」

その顔に笑みが浮かんでいるのを見て、タケは小さく悲鳴を上げた。

「お兄さんさあ、凄いスケベな臭いがするよ。

こんな臭いを嗅いだらさあ」

男がタケの股間のもっこりを愛おしそうに撫でさすった。

「最後までしちゃうしか、ないよなあ」

最後！

その言葉にタケは身震いをした。

最後が具体的に何を意味するのか分からない。

けれど、不潔な股間を嗅がれるよりもおぞましいことをされてしまうのだ、ということは想像がついた。

「た……助けて……」

タケの口からようやく救いを求める声が出た。

「だ、誰か……助けて……」

タケはバスの座席に座った乗客たちに視線を向けた。

けれど、乗客たちはにやにや笑ってタケを見つめているだけで、誰も動こうとしない。

タケは絶望と共に理解した。

このバスは今、タケだけが孤立する動く密室でしかないのだ。

「ほら、お前たちも嗅いでみろよ」

「止めろ！ 止めてくれ！」

タケは必死に暴れようとするが、鍛えているタケといえども、数で上回る相手に押さえ込まれていてはどうしようもない。

「おいおい、はしゃぐなよ」

「そんなにはしゃいだら他のお客様の迷惑になりますよ」

男たちが笑いながらタケの手に手錠を嵌めて柱に手を固定する。

別の男がタケの股間に顔をうずめた。

すう……はあ……すう……はあ……

男に不潔な股間の臭いを嗅がれている。

その事にタケは絶望し、おぞましさに身震いをする。

「やべーなあ」

タケの股間のもっこの臭いを嗅いでいた男が恍惚とした笑みを浮かべた。

「ションベンの臭いと汗の臭い、蒸れたチンポの臭いがギョーンと来るぜ。

こんなエッチな臭いをぷんぷんさせて、男を誘っているんだろ？

この変態め」

股間のもっこの臭いを嗅ぐような変質者に「変態」と呼ばれ、タケは羞恥と屈辱に身を震わせた。

タケが羞恥と屈辱に身を震わせている間に男たちが代わる代わるタケの股間のもっこの臭いを嗅いでいく。

男たちの行為のおぞましさはもちろんのこと、これよりもおぞましい行為がこの先に待ち受けているという汚らしい予感にタケは泣きたくなった。

「止めてくれよ……」

タケは涙を堪えながら男たちに懇願する。

「あんた、知らないのか。

スケベな奴の、止めて、はもってって意味なんだぞ」

「つまり、もっと虐めてほしいんだな」

「可愛いな、お兄さん」

男たちが下品な笑みを浮かべてタケを見つめている。

「なあ、どんだけスケベな臭いをさせているか、お兄さんにも味わってもらおうって言うのはどうだ？」

男の一人がタケの白のボクサーパンツのゴムを引っ張りながら提案した。

「それはいいな」

「いいことを言うじゃないか」

男たちが次々にその提案に同意を示していく。

「じゃあ、早速味わってもらおうぜ」

男の一人が鉋を取り出した。

そして、タケの白のボクサーパンツの太ももの側面から刃を入れると、ちゃきちゃきと音を立てて切り始めた。

「止めろよ、止めてくれよ」

タケは下着を切られること、そしてその結果として待ち構えているバスの中でのチンポ露出を恐れて声を上げるが、男たちは笑うだけでタケの訴えを無視している。

タケの白のボクサーパンツが無惨にも切り裂かれた。

男が白のボクサーパンツを取り払うと、男たちの目にタケのチンポが晒された。

平常時 7.3 センチメートルのタケのチンポは、男たちの蛮行に怯えて縮こまっていたもお、常人のチンポよりも大きかった。

チンポであるにもかかわらず、清廉な雰囲気漂わせる陰茎の先には、半分ほど皮を被った黒ずんだ亀頭がぶら下がっている。

「へえ、お兄さん、ヤリチンだね」

「このチンポで奥さんをアンアン言わせているのかな」

男の一人がタケの首にぶら下がった結婚指輪を手を取った。

「ほら、奥さん、見ていますかー？」

「今、旦那さんと遊んでいますよー」

男たちがゲラゲラと笑いだした。

タケは妻との愛の証である結婚指輪まで嘲笑の道具にされて屈辱に身体を震わせた。

けれど、男たちに数で負けているうえに両手を手錠で戒められているタケに、この状況を打開する手段はない。

「ほら、お兄さんのエッチな臭い、味わいなよ」

男がタケのボクサーパンツだった布を丸めるとタケの鼻と口に押し当てた。

タケの鼻にションベンと汗と、それらによって蒸れたチンポのむわっとした臭いが充満する。

その臭いの不潔さにタケは思わず顔を逸らす。

けれど、男たちはタケが逸らした顔にぐいっとボクサーパンツを押し付けてタケに屈辱的な臭いを嗅がせようとする。

「ほら、スケベな気分になってくるだろ？」

「止めてくれ……」

男の問いかけにタケは首を振った。

「おいおい、俺たちは親切でお兄さんと遊んでいるんだぜ」

「スケベなお兄さんにこそ問題があるのに、何嫌がっているんだよ」

男たちが手前勝手な理屈でタケを詰る。

「なあ、口で味わっていないから、このスケベな臭いの良さが分からないんじゃないかな」

男の一人がおぞましいことを口にした。

「それもそうだな」

「お兄さん、無自覚スケベっぼいな」

男たちが同意を示していく。

「ほら、お兄さん、口を開けな」

男の一人がタケの頬を叩いた。

「嫌だ」

けれどタケは歯を食いしばって首を振った。

己の下着を、それも数日間穿き続けた不潔な下着を口に入れるなんて、まともな男ならば、いや、まともな人間ならば嫌悪して然るべきことだ。

「お兄さんさあ、チンポとお別れしたいのかな」

男の一人が鋏をチャキチャキと打ち鳴らしながらタケのチンポに近づける。

「う、うそだ……もごう」

男たちの行為に驚いて声を上げたタケの口に、男の一人がボクサーパンツを押し込んだ。

顔に押し当てられているときよりも濃度と不潔さを増した下着の臭いにタケは吐き気を覚える。

けれど、男の手によってタケの口は塞がれているため、タケはボクサーパンツを吐き出すこともできない。

「ああ、分かるぜ。

お兄さん、スケベな気持ちが高まってきただろ？」

「こんなスケベな臭いを嗅いでいやらしい気分にならないなんて、不能だよな」

タケが目には涙を浮かべ、男の手から逃れようと首を振っているというのに、男たちはにやにやと笑っている。

タケは酸っぱさが混じった不潔な臭いに全身の血液が毛羽立ったかのような不快感に襲われる。

「さてと、お兄さんのチンポをチェックしてあげようかな」

男の一人がタケのチンポを手を取った。

男の急所であるチンポを赤の他人に触られ、タケは身震いをする。

「まずは皮をムキムキしてっと」

男がタケの包皮を剥いた。

「おおおおお、こりやすげえや」

「本当に凄いな」

「こんなの見たことないぞ」

男たちがタケのチンポを見て大声で嘸し始めた。

タケは男たちが何を嘸し立てているのか気になり、涙目で己のチンポを見た。

根元まで皮を剥かれたタケの黒ずんだ亀頭は雁首も目立つ立派なものであった。

通常の状態だったのならば、立派なチンポと男たちの羨望を集めただろう。

けれど、今のタケはシャワーを浴びる間もなく数日間を会社で過ごした不潔な状態だ。
当然ながら、包皮の下を清潔に保つ余裕もない。

結果、タケの黒ずんだ亀頭には包皮で覆われた部分が白くべっとりとチンカスがついていたのだ。

「まともな男なら、こんなに不潔なままでいられないよな」

「違うない」

「お兄さん、とんだスキモノだな」

「チンカス熟成が趣味だなんて、エロ過ぎ」

男たちがタケのチンカスを嘲笑う。

タケ自身も亀頭にべっとりと張り付いたチンカスが恥ずかしくてたまらない。

今にも腐ったチーズの様な臭いが鼻に届きそうな気さえする。

「なあなあ、お兄さんの熟成チーズの臭い、味わわせるのはどうだ？」

「いいことを思いつくよな、お前」

「だろだろ？」

男たちがおぞましいことを提案する。

「けどさ、どうやって味わわせるよ」

「そりゃもちろん、鼻に突っ込むんだよ」

チンカスを鼻に突っ込む！

タケはおぞましい提案に震えが走った。

男たちが嘲笑うようなチンカス熟成の趣味など、タケにはない。

今、不潔なチンポをしているのは仕事が多忙だったためであり、普段はシャワーの際にちゃんと皮を剥いて洗っているのだ。

チンカスなんてごみ同然の汚いものだ。

ぬるぬるとして臭く汚らしいものだ。

タケは大学生時代に所属していた剣道部のしきたりにより、チンカスチンポを味わわされたこともある。

だからこそ、チンカスの汚さも不潔さもよく知っている。

それを鼻に入れられるだなんて、想像しただけで吐き気がする。

「うーうーうー」

口にボクサーパンツを入れられ、その上から手で押さえられながらもタケはどうか抗議の意を伝えようとした。

「そんなに焦らせるなよ」

「心配しなくても欠片も残さず鼻に入れてやるよ」

だが、男たちはタケの抗議を邪推して嘲笑う。

「けどよ、どうやって鼻に入れるよ」

「手で拭うには……汚いよな」

「そうだよな。」

まともな男なら他人のチンカスなんて触りたくもないよな」

男たちの言葉はタケの男のプライドを傷つけた。

剣道部のしきたりに従ってとはいえ、他人のチンカスの味や臭いを知っているタケを、知

らぬとはいえ男たちはまともな男ではない、と嘲笑ったからだ。

「じゃんけんで負けた奴が拭うっていうのはどうだ？」

「やだよ、こいつのチンカス臭そうだし」

「だよなあ。

まともな男なら他人のチンカスなんて触りたくもないしな」

男たちの邪悪な相談が続いている。

タケとしてはチンカスを鼻に入れるなどというおぞましい提案は失敗に終わってほしい。

「あ、俺、綿棒持ってたわ」

だが、タケの祈りは届かなかった。

男の一人が鞆から綿棒を取り出したのだ。

「お、綿棒ならこんな汚いチンカスに触らなくて済むな」

「ナイス！」

男たちがにやにやと笑う。

「じゃあお兄さん、お待ちかねのチンカスティスティングだ」

「ううー！」

タケは必死に声を出して抗議の意を示す。

けれど男はタケの抗議など意にも介さない。

男はタケの陰茎を手にとると、綿棒をチンカスがべっとりとくっついている雁首付近に近づける。

「うう……うううう」

タケは身体をくねらせた。

敏感な雁首を綿棒でなぞられ、背筋がゾクゾクとしてきたのだ。

タケのチンカスは男の持つ綿棒に絡みついていく。

男が綿棒で擦るたび、タケの亀頭のチンカスが剥がれ、亀頭の黒さが露わになっていく。

男の持つ綿棒がタケの雁首を何度も往復する。

タケは亀頭をなぞられる刺激に耐えきれず、チンポが勃起し始める。

「おいおい、チンカス掃除で勃起していやがるぜ」

「いやらしいチンポだな」

「綿棒でなぞられて淫らな気持ちになったんだな、変態め」

男たちがチンポを勃起させ始めたタケを馬鹿にする。

タケは涙に潤んだ目で男たちを睨むことしかできない。

やがて、男がタケの亀頭から綿棒を離した。

タケのチンポはフル勃起まで半ばという程度に勃起している。

男はチンカスがべっとりとこびりついた綿棒をタケの目の前に持ってきた。

「こいつをこれから鼻の中に入れてやるからな」

「うう！ ううううう！」

チンカスを鼻の中になど入れられたくないタケは首を振って必死に抵抗する。

だが、タケは両手を手錠で戒められているうえに、数の上で男たちに負けている。

男の一人がタケの頭を押さえて、タケの抵抗を封じる。

「暴れなくてもきちんと入れてやるからな」

「うう……うううううう」

口に入れられたボクサーパンツの奥で、タケは必死に声を出す。

だが、男はにやにやと笑いながらタケの鼻孔にチンカス綿棒を近づけていく。

それにつれて、タケは腐ったチーズのような己のチンカスの臭いを感じてしまう。

男がタケの鼻孔に綿棒を突っ込んだ。

「うううう」

鼻の中にチンカスの臭さが充満し、タケは涙を流した。

訳が分からなかった。

どうして己がこんな辱めを受けなければならないのか、理解できなかった。

「おいおい、お兄さんが泣いて喜んでいるぜ」

「チンカステイティングができて嬉し泣きか、どうしようもない変態だな」

「チンカスの臭いはたまらないか」

男たちが涙を流すタケを笑う。

タケは情けなさで気持ち悪さで嗚咽を漏らす。

「奥さん、聞こえますかー」

旦那さん、チンカステイティングで感極まっていますよ」

男がタケの首にかかった結婚指輪を手にとって、電話をするように語り掛ける。

タケの脳裏に妻の顔が浮かんだ。

愛する妻にこんなことを知られるわけにはいかない。

いや、そもそも、男である己が男に弄ばれているなどどうして誰かに話すことができようか。

「じゃあ、お兄さんを愉ませてあげたわけだし、俺たちも愉ませてもらおうかな」

男の一人がタケの尻を掴んだ。

タケはマ○コもついていない男の尻で何をされるのか想像してしまい、おぞましさに震えた。

タケはノンケだ。

ノンケなのだ。

家に帰れば愛する妻が待っている一人の男なのだ。

そのタケが男に犯されてしまう……

その想像のおぞましさにタケの全身が震える。

「へえ、綺麗なアナルじゃん」

男がタケの尻肉を左右に割り開いた。

タケ自身、まじまじと見たことのないアナルを赤の他人にじっと見られている。

その汚らわしさにタケは唇を震わせる。

「お、俺に見られてアナルがヒクヒクしてやがる。

見られて興奮しているんだな」

男がタケの尻をピシヤリと叩いた。

「おお、本当だ。

随分綺麗なアナルだな」

「お兄さん、顔もイケメンだけどアナルも美形だね。

ピンク色で形のよいアナルをしているじゃん」

男たちがタケのアナルを鑑賞し始める。

タケにとってアナルは排泄器官だ。

そんなものをまじまじと観賞される恥辱にタケの顔が赤くなる。

タケはこれ以上の辱めなどないと強く感じた。

だが、男たちの悪意はまだ終わりではない。

つんつん。

排泄の後始末の時にしか触れたことのないアナルを男に触られ、タケは全身を強張らせた。

「おうおう、緊張しちゃって可愛いなあ」

「まるで処女みたいだな」

「男なのに処女っておかしくないか？」

「いや、処女じゃない方がおかしいだろ？」

男たちが代わる代わるタケのアナルに触れながら下品な会話をする。

「うう……うー……うー」

止めてくれ！ そんな汚いところで遊ばないでくれ！

タケは口に押し込められたボクサーパンツの奥で抗議の声を上げる。

けれど、タケの抗議の声はボクサーパンツに阻まれて言葉として口から出ないし、言葉として空気を震わせたとしても男たちの心を動かしたりはしないだろう。

「なあなあ、指、入れてみていいだろ？」

男の一人がタケにとっておぞましい提案をする。

タケは必死に首を振る。

考えただけでもおぞましい。

アナルに触られているだけでもおぞましいというのに、出口でしかないアナルに他人の指が入れられるだなんて汚らわしい。

「いいんじゃない？」

「こんなに綺麗なアナルなら指の一つや二つ、問題ないだろ？」

「そうだよなあ。」

綺麗なアナルには指を入れるもんだってじっちゃんも言ってたしな」

「こいつもアナルをヒクヒクさせて同意しているしな」

タケは男たちの言葉に必死に首を振るが、男たちはタケの仕草を気にも留めない。

「それじゃあ、アナル掘削開始ー」

男の言葉と共にタケはアナルに違和感を覚えた。

排泄の時以外締まっているべきアナルが開かれたのだ。

反射的に閉じようとしても男の指に阻まれ、閉じることができない。

「おお、締め付けきついわ、このアナル」

男が感心したように笑う。

タケはアナルの違和感におぞましさを覚え、指を追い出そうと力むが、男の指を締め出すことはできない。

男がタケのアナルに指を出し入れし始めた。

タケは排泄し続けているかのような感覚に襲われる。

力んでもいないのに、アナルに出し入れされる指が排泄の記憶を思い出させ、タケの羞恥心を煽っていく。

「うう……うううう……」

止めてくれ……

指を出し入れするのを止めてくれ……

タケは必死に男たちに訴えるが、口に押し込められたボクサーパンツが邪魔をして不明瞭な音にしかならない。

「は一、このアナルでチンポを抱きしめられたら気持ちいいだろうなあ」

男の一人が汚らわしい妄想を口にする。

「そんなに締め付けがいいのかよ」

「お前も指を入れてみろよ」

「おお、そうか」

ズムリ……

タケはアナルに衝撃を覚えた。

別の男がタケのアナルに指を割り込ませたのだ。

強引にアナルを割り開かれ、タケは顔を歪ませた。

「おお、こりゃ凄い締め付けだな」

「だろだろ、マジで凄いだろ」

男たちが笑いながらタケの指にアナルを出し入れする。

その感触にタケは排泄の感覚をより強く思い出してしまう。

開かれ続けたアナルがピリピリと痛む。

もう止めてくれ……

タケはボクサーパンツの奥で呻いた。

だが、男たちは代わる代わるタケのアナルに指を出し入れする。

タケは排泄し続けているかのような感覚に強く羞恥心を刺激され、全身から冷や汗を流す。

タケは手錠をガチャガチャと鳴らしながら身体を震わせる。

「じゃあ、そろそろ奥を可愛がってやらないとなあ」

男たちがゲラゲラと笑いだした。

そして男たちがタケのアナルに出し入れしている指を根元まで押し込んだ。

「んんんん！」

タケは全身に電撃が走ったかのような衝撃を受けた。

排泄し続けているかのような感覚だけでも辛かったのに、腰の奥から未知の感覚が湧き上がってきたのだ。

不快な感覚ではなかった。

不快な感覚ではないことこそが、タケには恐ろしかった。

気持ち悪かったり痛かったりしたのなら、タケは安心できただろう。

アナルという排泄器官を弄ばれて苦しむ「まともな」男という自意識に安心できただろう。

けれど、現実のタケは男たちにアナルを弄ばれて未知の感覚に悶えている。

悶えてしまっているのだ。

タケの股間ではチンポが勃起し始めている。

陰茎に流れ込んだ血流が海綿体を膨らませ、タケのチンポを大きく硬くさせる。

それに伴って黒ずんだ亀頭を覆う包皮が雁首に向かって後退していく。

「おいおい、勃起しているよ、このお兄さん」

「ケツを掘られて気持ちいいんだろ」

「男のケツを掘ってやっている俺たちって善人だよな」

男たちがタケの勃起を嘲笑う。

タケチンポに触れずに勃起している己を嘲笑われ、怒りと屈辱に震える。

けれど、その怒りと屈辱もアナルから全身に広がる快樂に乱され、持続できない。

助けてくれと思う端から続けてくれと思ってしまう。

止めてくれと思う端からアナルが悶える。

タケは己の身体の変化に戸惑い、喘いだ。

ボクサーパンツに遮られているタケの吐息の質が変化し始めた。

羞恥に喘ぎ苦しみの色に染まっていた吐息が、徐々に悦びと切なさに染まりだしたのだ。

タケは己の変化に戸惑った。

チンポが勃起している己をはしたなく思った。

早くチンポに萎えてほしかった。

けれど、現実是非情であった。

タケのチンポは完全に勃起している。

鈴口からは我慢汁が溢れ出し、バスの床に向かってつつうと流れ落ちていく。

タケがアナルをほじられて感じていることはその上気した顔や勃起したチンポが明確に証明している。

タケは、男たちに弄ばれる現状に快樂を得ているのだ。

タケのアナルは男たちの指を受け入れている。

男たちの指は五本になり、アナルを大きく広げているが、タケは広げられたアナルに痛みを感じる余裕もない。

男たちの指がタケのアナルの奥、前立腺を圧迫するたびに溢れ出る快樂を受け止めきれずに全身を情欲に火照らせることしかできない。

タケの中で嫌だという思いよりも、もっと、という欲情が溢れていく。

タケは己の心の変化が恐ろしかった。

けれど、タケの身体は快樂に染められていく。

「ううう……ううん……」

タケの呻き声にも淫靡な艶がぬらぬらと照り輝いている。

「そろそろいいかな」

その言葉と共に、男たちが一斉に指を抜いた。

「うん！」

指を引き抜かれる解放感と解放された前立腺の寂しさにタケは呻いた。

五本の指を引き抜かれたタケのアナルは一瞬、ぽっかりと黒い穴を見せるがすぐに恥じらう乙女のようにアナルをすぼめた。

「ははは、締まりの良いアナルだな」

「これなら俺たちのチンポも気持ちよくさせてくれるだろうな」

「お兄さん、幸せ者だよな。」

男のケツなんかに興味を持つ善人に遊んでもらえるんだからな」

男たちがゲラゲラと笑った。

そして、男の一人がタケの前にやってくるとパンパンに股間が膨れ上がったジーンズのチャックを下ろした。

チャックの隙間から男の下着が大きく前に迫り出す。

タケの勃起チンポほどではないが、それなりの大きさのチンポが勃起していることが分かるもっこりだ。

男が笑いながら、そのもっこりを掌で撫で擦った。

「お兄さんのいやらしい目つきのせいで、俺のチンポが勃起しちゃったよ」

男が己の勃起をタケのせいにする。

「スケベなお兄さんだな」

「罪深いな」

男たちがゲラゲラと笑う。

タケは男たちの自分勝手な理屈に震えることしかできない。

「そら、物欲しそうにしているから見せてやるよ」

男がジーンズと下着を下ろした。

ぶるんと男の勃起チンポが露わになる。

男の勃起チンポは真珠を幾つも埋め込まれた凶悪な見た目をしていて、

勃起してもなお清潔感のあるタケのチンポの対極と言っても過言ではない。

その亀頭は使い込まれて黒ずんでおり、亀の目のように雁首付近にピアスが二つ装着されていた。

「よく見なよ、お兄さん。」

このおチンポがこれからお兄さんのアナルを犯してくれるありがたいおチンポだからな」

「男なのに男に犯される何て、お兄さん、レアな体験できるね」

「嬉しいだろ、お兄さん」

男たちがタケの尻を叩く。

「奥さん、これから旦那さんの尻で遊ばせてもらいますよー」

男の一人がタケの首にかかった結婚指輪を摘まみ、電話をかけるように囁く。

タケは必死に逃げ出そうとした。

手錠を外すことも叶わないのに、それでもなお、必死に手錠を外そうとする。

「はいはい、お兄さん、期待しすぎ」

「そんなに興奮しなくてもいいんだよ」

「お兄さん、スケベだな」

男たちがタケの全身を叩いていく。

タケの尻が力強く掴まれた。

あんなチンポを挿入されてしまうのか……

タケは恐怖に顔を歪ませた。

「それじゃあ、お兄さんのアナル、いただきます」

男がタケのアナルに真珠チンポを押し当てた。

直前まで五本の指でほぐされていたタケのアナルは抵抗らしい抵抗もせずに男の真珠チンポを受け入れていく。

「うう……うううう……」

タケはボクサーパンツの奥で呻いた。

真珠がアナルを擦るたびに不快感と違和感に襲われ、全身がモゾモゾとする。

「あー、やべー、お兄さんのアナル、マジでやばいわ」

「そんなにやばいわけ？」

「女よりも凄いわ、このお兄さん。

なんつーの、チンポを抱きしめる才能しかない感じ？」

男たちの言葉がタケの雄のプライドを傷つける。

俺は男なんだ、という反発がタケの中に生まれる。

けれど、その反発も雄膣からにじみ出る快樂に蕩け、鈍っていく。

怒りも恥辱も継続できない。

男なのに、男に犯されて感じてしまう戸惑いも途切れ途切れになる。

ただただ、雄膣を満たされ、前立腺を抉られる快樂にタケは溺れていく。

タケの雄膣を犯す男がタケの腰を強く掴んだ。

パンパンと下腹部をタケの尻肉に打ち付けていく。

征服者の激しい性の蹂躪にタケの勃起チンポは震え、我慢汁をまき散らし始める。

「うう……うう……うごへえ」

快樂に悶えるタケの口からボクサーパンツが吐き出された。

「や、止めてくれ！

やだ！ ケツは嫌だ！」

タケは己がノンケであることを自覚しようと必死に抵抗の言葉を紡ぐ。

タケはノンケだ。

ノンケなのだ。

ノンケなのだから、男にケツを掘られて気持ちよくなったりしてはいけけないのだ。

タケは必死にそう思い込もうとする。

けれど、タケの身体は快樂に溺れている。

全身は汗に濡れて淫靡な艶に照り輝いており、勃起チンポから垂れ流れる我慢汁の量も増える一方だ。

「やだって割にはお兄さんのケツ、俺のチンポを離さないんだけどな」

「お兄さん、チンポが好きなんだろう？」

「こんなにチンポを勃起させて嫌なはずがないじゃん」

男たちはタケの言葉をまともに受け取らず、ゲラゲラと笑いだす。

真珠チンポが前立腺をゴリゴリするたびにタケは全身が激しく震える。

ノンケにあるまじきことのはずなのに、タケは雄膣の快樂に嫌悪感を抱くことができない。

恥ずかしいことではあるが、嫌悪感が生まれないのだ。

その事実がタケを追い詰めていく。

タケの身体が、男に抱かれることを当然のように受け止めている気がして、恐ろしさを覚える。

「あ、やだ！ や！ だめだ！」

真珠チンポにピストンされるたび、タケの口から喘ぎ声が溢れる。

口では拒絶の言葉を発しているが、その声音は男を煽り、更なる情交を強請るものになりつつあった。

タケを凌辱している男は、タケの喘ぎ声に燃え上がったのか、腰を掴む手に力が入り、征服者のピストン運動が過熱する。

タケはその激しいピストン運動に、腰の奥が掻き回され、熱いうねりが溢れ出そうになっていることに気がついた。

射精しようとしている！

チンポに触れてもいないのに射精しようとしている己に、タケは恐怖した。

射精してしまったら戻れなくなる、と強く感じたのだ。

「たすけっ！ ひぎい！ たすけて！ だれか！」

タケは射精を恐れて必死に助けを求める。

けれど、このバスの中にはタケの痴態を愉しむ者はいても、窮状を救おうとする者はいない。

だから、タケは行きつくところまで行くしかないのだ。

「あ！ ああ！ やだ！ やめて！ やめて！」

タケは必死に抵抗の言葉を紡ぐ。

けれど、その抵抗の言葉も淫らな悦びの音色を響かせている。

タケの勃起チンポがブルンブルンと激しく上下に震える。

「ああ！ でる！ でるう！」

タケの目から涙が零れた。

と同時に、タケの股間から雄の臭いが漂ってきた。

タケの勃起チンポが大きく振りあがり、ぬとおとザーメンを流し始めたのだ。

タケは男に犯されてトコロテンをしてしまったのだ。

「俺もイクぜ！ ぶちまけるぞ！」

タケを犯している男が征服者の律動を早め、射精したばかりのタケを追い詰めていく。

タケにはトコロテンしてしまった己へのショックを感じる余裕も与えられないのだ。

「そら！ 受け止める！」

男が激しく身震いをすると同時に、タケの雄膣にザーメンがぶちまけられた。

タケは男のザーメンの熱さに全身を震わせる。

種付けされてしまった。

男なのに、男に種付けされてしまった……

タケの目が絶望に濁った。

ばっきりと心が折られてしまったのだ。

「へへへ、どうやら俺たちの魅力が分かったようだな」

「お兄さん、俺たちに遊んでもらえて幸せだな」

「まだまだ夜は長いからな、たっぷり楽しもうぜ」
男たちがタケの手から手錠を外す。
手が自由になったというのに、タケは男たちに抵抗しようとしなかった。
「それじゃあ、次は俺のザーメンを種付けしてやるぜ」
別の男がタケの腰をぐっと掴み、勃起チンポをアナルに押し当てる。
「ああ……やめてくれ……」
タケが小さく呻いた。
けれど、その声に抵抗の意味が含まれていないことは誰が耳にしても明らかであった。

夜明けの住宅街でバスが止まった。
バスの扉が開くと、情交の臭いがバスの外に漏れだした。
早朝の住宅街には誰もいないが、誰かがいたのならば何十発も放たれたザーメンの臭さに顔をしかめただろう。
「そら、もう十分遊んでやっただろ」
男の声と共に、タケが道路に向かって突き飛ばされた。
タケはよろめき、道路に倒れ込む。
その姿は無惨なものであった。
髪の毛はぼさぼさに乱れ、上半身のワイシャツは皺だらけ。
輪姦の途中で邪魔だと切り裂かれたスラックスの残骸が左足に絡みついている。
何発も何発も कोरोテンをさせられたタケのチンポは輪姦の名残からか勃起したままだ。
そして、アナルからは収めきれなかったザーメンが溢れている。
クラクションを鳴らしてから、バスが走り去った。
タケはゆっくりと身体を起こす。
その動作でタケのアナルからザーメンが零れ、内ももに白濁した染みを広げていく。
タケは勃起チンポを手で隠しながら歩き始めた。
妻が起きる前に家に帰って輪姦の痕跡を消さなければ……
それだけを思い、ふらふらと住宅街を歩きだした。

奥付

『覆面既婚ノンケ男優タケ・下』より、閑話四、第四話

初出：2021年9月25日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep